

事業の名称	ツーリズムにおける英語での発信力習得システムの研究
<p>事業実績</p> <p>1 事業実施年度 令和2年度</p> <p>2 事業実施内容</p> <p>現在、教育の「時間」と「場所」の拡大の可能性を期待される遠隔授業であるが、近年では様々な遠隔授業に関する事例検証により、その有効性と共に幾つかの弱点も指摘されている。本事業の目的は、今後機会の増加が予想される遠隔での英会話レッスンシステムの試行を行い、その効果的な運用方法と可能性について考察することである。</p> <p>赤倉・柏原（2016, p.87）によると、遠隔授業システムは、対面での受講に比べ、遠隔地での受講は緊張感や臨場感に欠ける傾向があるなど、講師から受講者の理解状況や反応が把握しがたい等の問題があるとしている。また、杉原（2005）では、ビデオ映像と音声によるコミュニケーション（Video-Mediated Communication）は、一般的に対面コミュニケーションに比べて円滑ではなく、対話上の問題が生じやすいとしている。理由としては、相手の社会的存在感が薄いことや、相手の視覚的手掛かりが少なく、会話の自発性、多様性が損なわれることなどを挙げている。</p> <p>一方、英会話レッスン受講者からのニーズは多様化する傾向にあり、例えば、「楽しみながら・遊び心を持って会話練習を行いたい。」「仕事やバイトの後、空いている時間に受けてたい。」「自宅や都合の良い場所でレッスンを受けたい。」「交通費を節約したい。」「1対1での会話レッスンが望ましい。」などが挙げられる。</p> <p>本事業では、受講者からのニーズを最大限に考慮し、かつ効果的な「英語での発信力習得システム」を構築するため、英会話レッスンシステムにいくつかの特徴を取り入れた。まず、「楽しみながら、遊び心を持って」会話練習を行う要素の一つとして、今回の英会話レッスンでは、アバターの作成にフリーの顔認識ソフト FaceRig を使用した。FaceRig は、PC の Web カメラなどを介し、ユーザの表情や若干の頭部の動きを 3D キャラクターに反映できる顔認識ソフトで、まばたきや口の動きなどにも連動しているため、会話練習には比較的適していると思われた。FaceRig にはいくつかの 3D キャラクターが用意されていることと、フリーであることから、学習者もキャラクターを選び、アバター同士での英会話レッスンも可能であった。また、レッスン時に使用したアバターには、Richmond & McCroskey, 2003 山下訳 2006 を参考に、教員と学生の非言語的關係性の中で重要な要素とされている、①教師の外見的特徴（physical appearance）、②ジェスチャーと動作（gesture and movement）、③表情行動（facial behavior）、④視線行動（eye behavior）、⑤音声行動（vocal behavior）、⑥空間（space）、⑧環境（environment）、⑩時間（time）、を非言語情報として取り入れた。</p> <p>更に受講者の発話や上達度を外化するために、受講者が使用した英単語のレベルをレッスン後に提示する、発話評価システムを試作し、受講者に利用してもらった。使</p>	

用単語レベルの評価には JACET8000 を使用した (図 1. 参照)。

単語総数	135
単語種類数	88
使用単語レベル 中央値	1.00
使用単語レベル 平均値	1.3
使用単語レベル 最高値	7

単語一覧

語句	集計	Jacet8000	
		レベル	新J8順位
first	1	1	73
feel	1	1	219
every	1	1	141
encouraging	1	5	4634
do	1	1	27
divided	1	2	1907
determine	1	2	1692
could	1	1	54
city	1	1	194
basics	1	1	1
at	1	1	16

読みやすさの評価 使用単語レベル 熟語リスト 単語リスト 新J8K

※選択し、Enter キーを押すか 貼り付けを選択します。

図 1. 使用単語レベル評価システム試作例

今回の事業では、双方向による遠隔英会話レッスンの終了後に、評価システム(試作)を使用し、受講者からの内省 (reflection) を促した。

また、レッスン終了後、受講者にはインタビュー調査を行った。インタビュー調査の結果から、教員側から多様な非言語情報を提示することにより「話を聞いてくれている」、「理解してくれている」との手掛かりを受講者に与えることが可能になることが分かった。また、今回の受講者に関しては、英語でのコミュニケーションに不安を持つ参加者であっても、遠隔での匿名的な英会話レッスンには、比較的容易に参加し、継続してくれる傾向が見て取れた。さらに双方向での音声、文字情報の同時送信は、学習者の思考のプロセスを外化することが可能となり、学習者の自己調整 (self-regulation) や省察 (reflection) 等に繋がる可能性も感じられた。以上の結果から、今回の事業成果としては、今後の遠隔英会話システム運用について、一つの知見を得ることができたと考えている。

今後は、遠隔英会話レッスンの実質的運用に向け参加者を増やすとともに更なる定性的・定量的検証を含めた継続的な調査を行う予定である。

参考文献

- 赤倉貴子・柏原昭博 (編) (2016). 日本教育工学会 (監修) 教育工学選書 II 1 e ラーニング/e テスティング (p.87) ミネルヴァ書房
- 杉原真晃 (2005). 遠隔授業におけるコミュニケーションの特徴と学生の学びの検討 -KNV 実践の分析を通して- 京都大学高等教育研究, 11, 67-81.
- Richmond, V. P. & McCroskey, J. A. (2003). *Nonverbal behavior in interpersonal relations*, Boston, MT: Allyn & Bacon. (リッチモンド, V. P. & マクロスキー, J. A. 山下 耕二 (編訳) (2006). 非言語行動の心理学 北大路書房)

大学英語教育基本語改訂特別委員会．(2016)．大学英語教育学会基本後リスト新
JASET8000 桐原書店

ソフトウェア

FaceRig (Version 9.0) [Computer software]. Holotech Studios, CA: San Francisco.

3 事業完了年月日 令和3年2月28日

4 成果の還元状況

研究成果の一部は、JASEC Bulletin（日本英語コミュニケーション学会）第29巻第1号に投稿・掲載された。その際、公益財団法人青森学術文化振興財団からの助成事業であることを明記した（資料1参照）。また、2020年10月17日（土曜）JASEC第29回年次大会（Zoom使用によるオンライン大会）にて研究成果を発表した。（資料2参照）。